

人間の経済

第2期 第 **11** 号 (通巻 89 号) 2005年4月6日刊

<wija version 0.10 (change 901) リリース記念>

増・減価型 i-ワットの活用

森野 榮一



増・減価型 i-ワットの活用

森野 榮一

wija+iWAT (1) では、減価型 W A T (R O T : reduction over time) 並びに増価型 W A T (M O T : Multiplication Over Time) が利用できるようになり、W A T システムズ (2) はその可能性を広げつつある状況です。それらはどのように活用できるのでしょうか。その初歩を考えていきたいと思います。

発券取引で A を振出人、B を貸付人としましょう。

B は A の事情をよく知っているとします。

例えば

- 1 A は困窮していて、B はなにか支援ができないか考えている
- 2 A は新規に事業をしたいと考えているが必要な資材、資金に不足している。A の意図していることに B は支援したいと思っている

としましょう。

そして、A は B が持っている財・サービスを必要とし、W A T での取引を要請したとします。

< 通常なら、 >

B がその取引に同意する場合、ゼロ率通常 W A T による取引となります。

< しかし R O T なら >

A の申し出に対して

1 の場合なら、B は、君の事情はよく承知している。そしてなにかできないかと考えてきた。しかし私のできること、できないことがあるので、君の W A T 債務が週 1 % 減価し、最終的には消滅するかたちで受け入れようではないか、私は君の R O T を支払い手段として使う場合、第三者にこの R O T が成立した事情を話し、それを受け入れてくれる人に使うだろう。受け入れた人も同様になすであろう、ということができます。

2の場合なら、Bは君の意図するところはすばらしい。なんらかのかたちで応援したい、といい、もし、ぼくの持つこの財・サービスでよければ、ROTと引換にこれら譲ろう、ただしすべてを放棄するのは私にも事情があるのでできないが、20WAT額面が最終的に10WAT(停止額)まで、週1%で減価していくROTで支援させてもらおう、このROTを第三者に使う場合は、君の事業の社会に対する有用性と自分がなぜ支援しているのかを必ず支払先に伝えようと思う、ということができます。

こうしてよりメッセージ伝達性が高く、信頼形成度が高いかたちでROTは回り始めます。

さて、ここではやばやと懐疑論者Xを登場させましょう。

X：そんなWATは第三者、例えばCに受領されないだろう。たとえCが君(B)の話信じるか、Aの事情を知っていようが、清算手段として受領されるかどうか、かなり悲観的だね。なぜなら減っていくだろう。

B：いや、支払いが遅延すれば減価するだけだ。すみやかに使用先をみつければ、減価分はきわめてわずかだよ。

X：まあ、それは受領されての話だ。もしAがたいした食わせ物で、おひとよしの君を騙したとしよう。Cはこう言うに違いないさ。あなた、Aがどのような人間がご存じですか。彼はあなたの憐れみに訴えて得をしようというような人間なんですよ。私はAのそんな約束(WAT券)は受け取れませんね。あなたにとってはそれは授業料になるでしょう。だれも受領しませんよ、DにもEにも・・・聞いてみてください、ってね。

B：いや、たとえそうだとしたら、Aはじぶんでじぶんの首を絞めているはずだ。AはわずかなWAT債務で信用を失うことになる。それを再び築き直すコストはかなり高くつくはずだ、それを顧慮にいれていないなどということはありえないよ。それに、それは清算請求が即座に自分に返ってくることをも意味している。ROTは発券取引で二者が約束した率で減価していく。もし減価分を騙そうという魂胆なら、減価分が時間の経過という未来に引き延ばされているので、騙そうとするには効率が悪いということでもある。そんな懸念を承知のうえで、人を騙そうとするなど高くつきすぎると考えるだろう。

X：なるほど。抑止力が常にはたらくわけか。だが、君はそれでいいかもしれない。Aに対する君のシンパシーがROTを成立させた。しかしCやDやという裏書人は君ほどシンパシーは感じていなかろう。受け入れることにどんなメリットがあるというんだ。

B：考えてみてくれ。それを受領するときのWAT価額はCにとって100%であるということだ。私（B）に財やサービスを引き渡して代価としてWATを受領するCはその代価の分を受け取っているわけだ。減価はCがそれをどの程度、時間の経過のなかで持ち越すかによって発生する。例えば週刻みで減価率が設定されたROTなら一週のうちにそれを使用すれば、減価を免れるというわけさ。よくいわれるようにこれは取引を促進する。それは我々に利益をもたらす。われわれはWATを使うことで貨幣使用のコストを回避しているうえに、ROTなら、Aの弱みが関係者の利益になるわけだ。Cが即座にAという発券者に清算請求をなすかどうかは、CがAの事情をどう考えるかに依存しているだろう。もしAが清算請求に応えられないときはぼく（B）に回ってくる。ぼくの事情は君（C）も承知だ。君はそれをDに、ぼくがしたような説明をして使用する可能性が高いだろう。

B：じつはこのことはゼロ率WATでも成立している支払い手段というものがもつ不思議な性格をROTがより明確にしているということでもあるんだ。その論証はサイトー・パラドックスと言われている。詳しい論証を目にすることがほどなくできるだろう。

われわれは貨幣という情報システムを使っている。それは中銀債務が貨幣化されているわけだ。債務は借りであり、当事者には負い目である。しかし中銀はそれを感じているだろうか。しかしそれはどうでもよい。われわれはそれを受け入れている。物財・役務の取引の決済に使っている。便利に使っているわけだ。中銀の債務は貨幣となって利便を提供している。この問題にはいまは触れないが、WATの場合は発券者の財ベースの債務が支払い手段化する。彼の借りは裏書人たちに、貨幣回避の支払い手段を提供している。これが可能となるのは関与者たちの信用のチェーンである。中銀債務はこれがないので、法定通貨たらざるをえない。

WATが生成し、ひとつの系をつくりはじめていくと、信用上の事故などを通してあることに関与者は気づく。

< 一種の手形であるから >

清算請求に発券人が破産したり、死んだり、行方知れずとなったりして、応じられないときがある。そのときは、清算請求が次の裏書人に対してなされる。その人が同様な事情である場合、その次ぎへと。もし事が順にそうなるとすると、清算請求者は自分自身に清算請求しなければならない事態に遭遇することも理論的には考えられる。

つまり一つの円環を閉じようとして、物財の流れと逆に流れた決済手段の流れは空無なものではないということさ。貨幣の場合にはわれわれはこれに振り回されている。しかし、WATの場合には振り回されず自分たちで決定しており、財の支払い手段とは逆向き

の循環をしている。経済の目的は必要な財・役務を必要としている人に得させることにあった。それが貨幣なしに実現している。関与者すべてが利益を得た！発券者の最初の債務という借りや弱みは関与者全員を救ったのだ。ひとのためにという気持ちが自分のためとして円環が閉じるときに帰ってくる。これがROTの場合は、より自覚的に現れる。

発券人への減価分の推譲（贈与）分は一枚のROTが作る系の発券者を除く関与者全員が負担する。それは当初、発券人Aのためであった。しかしそれによって、全員が結果的に利益をうる。Aへの推譲分はだれもがROTの発券者になりうるという可能性のなかで、支援の相互性をつくりだしていく。

これは、尊徳のいう一円にては貸借ありても貸借なしの相互主義を表現している。もちろん同じことは、相互主義の開祖、P.J.Proudhonも「経済的諸矛盾」の最終章で述べている。ただ尊徳とちがって、時間要素を軽視したので、交換銀行はモリナリの批判を受けざるをえなかったし、うまくいかんかった。

しかしROTは時間要素を抜きにしては成立しない枠組みなんだ。推譲は、された者にあってその分増し、なした者にあってその分減ずるが、これが相互になされるとき、全体の推転のなかで、推譲なきに帰す。ひとつの円が始まり、その時間を閉じる系の終わりの事前と事後においては、実質的富の在り方はその程度を変え、厚生を万人において増しているわけだよ。

X：しかしだ・・・そうした結構な事情があるにしろ、たったただいま、お前は損を承知で将来の得をとれと促すような動機は大概の人間はもっちゃあいねえ。損をしない場合（援助しない場合）でさえ、なんであれ契約とは未来を縛るものだ。WAT契約でもそうだ。それは契約が課す時間のなかに入ることだ。相手先がどんなに不幸でも、悲惨でも、俺は将来みな仲良しのバンバイザイのなかで利益があるといわれて自分に不自由を課すような関わりにわざわざ入っていくのはやだね。俺の友達は現金だけでいい。こんな世の中、先行きはなにが起こるかわからぬ不確かな世界じゃないか。やっかいな世界に入って泣きを見ても、知らないよ。

B：たしかに、われわれは誰だって、先行きの不透明が晴れることのない不安な只今を生きている。そういうときはカネしか頼りにならない、君の言ってることはわかるさ。カネなら大概の状況に対応できる、人間を信じるなんてことをしてないからさ。現金は不信の状況に似合っている！・・・で、君はカネを選好して少しは不安感が晴れたのかい。100円持って不透明な未来に備えることは、120円なければという不安感を生み出すだろう。120円手元に持つとき、それでは足らず、140円もとうとするだろう。いや、160円だ、180円だ、・・・事は永遠に君をつき動かす。そう、カネは安らぎを与えてくれそうで、そうでないよな。それが与える安堵とそれを求め続けるために引き受ける苦しみは大概釣り合っていないものさ。どうなんだい君は？

X：俺は頑丈にできてから大丈夫さ。独りでいるのが好きだし、人に期待することもない。人に期待することはかなえられることもあればそうでないこともある。そんなリスクを負うのはまっぴらだしね。カネは人を裏切らないぞ。100円の力は100円だ。お前もカネは大事にするもんだよ。

B：ああ。ありがとう。わかっているさ。われわれはなんでもカネで評価する癖がついている。あんたなんかは特にそうだろう。あんたの持っているモノ、不動産でもなんでもいい、そうしたものの、人の付け値がすごくても、それだけで俺はスゴイ資産をもっているなどとは舞い上がらず、実際にカネを介して取引するはずだ、そうして手元にキャッシュを握る、すくい上げるほどの紙の量だ。すばらしい。そうして自分がリッチだと実感しているに違いない。そういうあんたには、カネは血の一滴。1円たりともおろそかにできない。その大事なカネを狙っているんな誘いがあることだろう。孤独なあんたには相談相手はいないはずだ。せいぜい気を付けるがいいぜ。

だが、そうした君にも、もちろん損はさせない仕組みもWATにはある。そして少しはあんたにも社会的な関わりがもてるようにしてくれる仕組みさ。あんたは、その大事なカネを介してWATの世界と付き合いができるんですよ。

X：ま～、どうせ詐欺の類だろう。

B：詐欺ほどにはうまい話ではないけどね。われわれはROTの話をした。これには、もうひとつの枠組みがあるんだ。MOTという。

まあ、あんたには関心がない話だろうが、まずカネを使わない例からMOTの話させてくれ。

MOT (Multiplication Over Time) とは増価型WATの仕組みだ。

たしかに、君が憐れむような状況だよ、俺は。カネにならんこともしている。でもそれが私の生活だ。その活動のなかで、売れない、あるいは売れにくい品物も作っている。世間が私の活動に対して与えてくれる報酬は自分が思うほどではないものさ。しかし仕方ない。この流儀を変えるわけにはいかない。それが私自身だからだ。

ここに、例えばAとしよう。私の活動を知って、幾ばくかの応援をしたいという人間がでてきた。しかし、彼も私同様、カネは潤沢ではない。

そこでAは私の産品をWATで購入してくれた。このWATはゼロ率の通常WATではない。一定の区間(週とか月とか)を経過するごとに発券取引のときに私と取り決めた率

で額面価額から増価していくんだ。

Aは増価するWAT証券を私に代価として引き渡してくれる。そうしてこの増価は、これまた発券時に取り決めた停止額まで増価を続ける。この増価分はAによる私への推譲（贈与）だ。私は停止額が成立するまで、それを持ち続ければ増分すべてを受け取れる。しかし持ち続けず、第三者に使用する場合も、支払い手段として歓迎されるだろう。なぜなら、停止額まで、時間の経過のなかで増価するからだ。私にとっては使いやすい通貨となる。Aはそうすることで、私と私を経て繋がる人々に、じぶんが将来、清算をなす実物で推譲することで貢献をなした。私と私を経て繋がる、このWAT券の関与者たちは、等しくAを顕彰するであろう。私と私を経て繋がる者たちは、Aにいつか推譲することによって報いるであろう。

これは iwat を発券する画面だ。

新しいワット券

但し書き
<相手にだけ伝えられます>

券

貸付人: []

振出人: Eiichi Morino (GRSJ) <morino@grsj.org>

額面: 10

単位: kWh

増減率: 指定なし 編集する

メモ: <iワット券の一部として表示されます>

※ 券と引き換えに何を請求できるかなどを書いてください。

説明

ワット会員およびワット友の会より本券の提示をもって返済請求がなされた場合、市民共同発電所債あるいは提示者と合意しうる財ないし役務の支払いを約束します。
本券はワット会員の間で支払手段として受領されます。(ワット友の会)

ワットの目安
市民共同発電所では現在、10kWhのきれいな電力を、おおそパートやアルバイト労働の一時間の対価に相当するコストで発電しています。

取り消す 振り出す

Aは私宛に、iWAT を発券しようとする。

真ん中へんに、増減率、指定なしとあり「編集する」というの横長のボタンがある。ゼロ率のWATを発券するのがデフォルトになっているが、このボタンを押すと編集できる。

そうすると次のような画面がポップアップする。



どれだけの率で、週や月といったどれだけの区間ごとに増価したり減価したりするかをここで決めることができる。つまり増減価という変化を + から - のレンジで決定できるんだ。

Aは私にMOTで、つまり増価型で発券することで、私と私に繋がる者たちに容易に支援をなすことができるというわけさ。リアルWATでも同様のことはできるし、MAAS（前橋芸術家協会）ではすでにこれを何年も前からしているが、iWATはそれを汎用化したわけ。リアルWATでも券をデザインすればすぐにでも可能なんだよ。（減価型もデザイン待ちの状態）

X：ふん、おもしろいことを考えるじゃないか、まあ俺には関係ないけどな。第一、お前を助けようなんてこれっぽっちも思っちゃあいねえ。カネがからまないなら、したけりゃすればいい。

B：まあ、ひとの援助などいらないといっている人間に限って人の世話になるもんさ。あんたがいくら独りで強そうにしているも、何年持つかな、せいぜいため込み、隠し込んだ現金は大事にしておけよ。強盗も狙ってるかもしれないぜよ～。

そういうあんたもカネがからむ枠組みならちったあ関心があるかな。MOTにはこんな活用の仕方もあるんだ。

先の例ではAはカネに不自由していて、財やサービスの点では支援ができた。そのAはカネがあればもう少し事業もうまく遂行できるのにと思っている。ただカネを都合つけるには金利というコストが重いの、第一、金貸しが貸すかどうかわからない。

そこでだ、笑うなよ、この私（B）がカネをもっていて、できたら有意義な使い方をしたいと思っている。も、もちろんたいした額ではないさ。

たとえば、1000円くらいなら出せると思っている。

X：なんともみみっちいねえ。理屈をたてにひとから20万、30万まきあげていく、環境とかなんだとかいろいろ言っているお前の友だちがいるだろー、そういう手合いと同じように、もっと豪勢にカネを出したり、要求したりしたらどうだい。社会の役にたちてーんだろ。

B：あんたも知ってるようにカネは私のような勤労者にとっては血の一滴さ。逆さにしても鼻血も出ない状況なのは先刻承知だろー。その私がAの為なら1000円出したいと思っている。

私はAに1000円を売る。AはWATで代金を払うので、WAT券を振り出す。しかし、ゼロ率のWATでは、私に申し訳ないと思う。そこで、かれは自分の産品で返済する約束のWATを増価型にする。10WATの額面のWAT券はMOTとして週1%で増価し、11WATで停止するものとする。私は、そのWATをもっていけば1WATの推譲を受けることになる。そのWATは増価型であるゆえに、受け入れられやすいWATとして私の役にたつことであろう。Aには1000円が渡った。その1000円は、彼の事業で達成した産品で清算すればよい。清算額は11WAT。彼は債務奴隷にならず、生産者であり続けられる。

あんたも、少しは考えたらどうだい。情けは人のためならずというよ。

X：つまらない話をするねー。だったらAは1000円をはなから、11WATで買えばいいじゃないか。お前も1WATの実物ベースでのプレミアムが手に入る。

B：それはAのことを考えていない話だよ。Aはいまできたらなるだけ債務を負いたくない状況に立たされている。1WATのプレミアム分も時間の経過のなかにおくことができれば、その間に彼は事業を展開できる。私はたかが1000円だった。しかし、彼は多くの支援者たちから円貨を買うであろう。それは実物での返済約束といいながら、多額になれば重いものだ。出し手の私や多くの仲間たちは、停止額を迎えるまでの時間の経過のなかで、プレミアムを得ていく。その未来への遅延がAを支援することになる。私たちにとって円貨の放棄は、円貨が利を生む世界を作り出しているために、流動性プレミアムなどのプレミアムを得させなくするわけだ。それが円貨の放棄をためらわせている。資産を円でもつこととモノでもつことの違いがそこにはある。それがわれわれを苦しめ、君を円貨にこだわらせているわけだ。

もちろん、AのWAT券を引き受けることにはリスクがある。しかし、それはもしイスラム教徒であれば当然と思えるような性質のものだ。だって、普通、イスラムの銀行といえは無利子銀行といわれるがそれは正確じゃあない。預金者は、銀行に預金して(つまり貸して)預金利息をとるのではなく、銀行とともにそのカネの投資に係るリスクを共有する。そうして銀行とともに投資収益を得るわけだ。大事なものは、そこで起こっていることが、

カネが実物資産に変わっているという事実だ。

MOTでも私の1000円はAの生産に係る費用に充てられ実物資産に変わっている。イスラム教徒とは別の仕組みで同じことをしているだけともいえる。

X：まあ～、イスラム教のことは知らないけどね・・・

B：なに、あんたは拝金教徒なのかい？

X：お～、そうともさ。お前みたいに甘くはないから、いっちょ教えてやるか。世話が焼けるよ。まったく。俺はいつからこんな大甘と友達になったんだ、へっ！。

B：いつ友達になったか、わすれたのかい。あんたが、事業に失敗したときだろうが～。困難なときにはカネだけの人間は寄ってこないもんだ。カネにはにおいがあって拝金教徒は、そのにおいに敏感さ。だから羽振りのいいあんたには、いま、ろくな友達がいないんだよ～。カネのにおいがぶんぶんしてら～。お～、臭くてしょうがねえや。

試しに、違う世界に入ってみないか。ROTもMOTも人間の関わりのなかで活用される。どんな人間関係をもちたいか、それによって使える道具はたくさんあるのさ。いま、私たちは増減価型へとWATを一步進めた。まずはゼロ率WATから体験するのもいいだろう。これは多くのひとが活用しはじめている。だが、私たちが取り結ぶ関係は多彩だから、応用型から入るのもおおいに推奨されるべきだ。

お前にカネを稼がせてくれたのは世間だ。お前ひとりの力じゃない。「生きたカネを使え」と事業のなかで、われわれは教わったじゃないか。お前の、そのカネを世間に戻す時期がきているんじゃないか。

その戻す先を自分で決められる。それは実物資産に変わり経済を生き生きさせるばかりか、社会とそこにいる人々を活発にする。それがお前とお前につながる人々の利益となって返ってくる。それと同時に、カネ以外の報酬もくれるだろう。生きていてよかったと感じられるときもくるだろう。博打に使うも100円、MOTで100円売るのも100円だ。お前にはよい友達や同志ができることだろう。より豊かな実物資産を社会に残せる、それをMOTが可能にするんだ。MOTは実業に従事する私たちに役立つことだろう。

注

(1) <http://www.media-art-online.org/wija/>

(2) <http://www.watsystems.net/index.html>

参考文献

森野榮一、「減価型WATの実現」、「人間の経済」、第二期第一号(通巻79号)200

5年3月5日

森野榮一、「P2P型減価マネーの基本性格」、「人間の経済」、第二期第五号(通巻83号)

2005年3月20日

森野榮一、「清算遅延・分割型WAT券」、「人間の経済」、第二期第九号(通巻87号)

2005年3月30日刊

編集・発行 **ゲゼル研究会**

221-0021 横浜市神奈川区子安通3-321森野榮一気付

Gesell Research Society Japan <http://grsj.org/> info@grsj.org

Gesell Research Society Japan all rights reserved 許可無く複製・再配布を禁ず